流しの
したの骨
江國香織

流しのたの骨

江國香織

マガジンハウス

流しのしたの骨

一九九六年七月二五日　第一刷発行

江國香織——著者
赤木洋一——発行者
株式会社マガジンハウス——発行所
東京都中央区銀座3-13-10　〒一〇四-〇〇三
電話—書籍販売部〇三(三五四五)七一七五
書籍編集部〇三(三五四五)七〇三〇

凸版印刷——印刷所
小泉製本——製本所

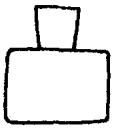
唐仁原教久——装画・装丁
神保正巳(HB制作室)——デザイン

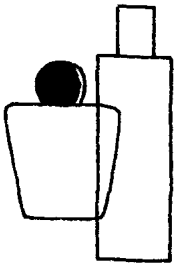
©1996 Kaori Ekuni　Printed in Japan
ISBN4-8387-0796-7 C0093
乱丁本・落丁本は小社書籍販売部宛にお送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
定価はカバーと帯に表示してあります。

流しのしたの骨

◉本文イラストレーション◉唐仁原教久

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com





私たちの母は、昔からずっと、朝父を送りだすと化粧をし、夕方父が帰ると化粧をおとして出迎えた。父は、帰る前に駅から必ず電話をかけてよこすので、母が化粧をおとすタイミングに腐心する必要はなく、化粧をおとしたあと、母は冬でもつめたい水で顔を洗って化粧水をつけるので、父を出迎えるときの母の顔はいつも頬が赤く、清潔でぴかぴかしているのだった。

私はそれをとても奇妙だと思っていたが、二人の姉や小さな弟の目には、ごく普通の光景に映っているらしかった。慣れているのだ。かーさんはそういう人だもの。いつだったかしま子ちゃんはそう言った。

私たちがまだ小さかった頃、母は私たちを連れてよく動物園にいった。朝父を見送ったあとに急に

思いたち、私たちに学校を休ませてでかけることもしょっちゅうだった。母は動物園を愛していた。
動物園にいくのはきまって冬だった。それもうっそりと曇ったおそろしく寒い日で、ときには小雨が降っていさえした。母は黒いスウェードのハーフコートを着て、衿元にあかるいオレンジ色のスカーフをのぞかせていた。動物園はがらがらで、動物たちはみんなどんよりと愚鈍にみえた。
そこでの母の気に入りはなんといっても縞うまで、母は、縞うまを眺めるのにとてもながい時間を費した。次に好きなのがフラミンゴだった。ピンク色できれい、というのがその理由で、母はいったんそれらの動物の前に立ったが最後、数十分石のように動かないのだった。
私たちは少し離れた場所で、けんけんぱあやだるまさんがころんだをして遊びながら待った。小さな棒きれを拾い、それで柵をからからとこすりながら歩いたりもした。
私たちにもそれぞれ気に入りの動物はいた。そよちゃんはオオカミでしま子ちゃんは栗鼠、私は熊で、律はハリネズミだった。
動物園をでると、近くのパン屋で牛乳を買ってもらった。私とそよちゃんとしま子ちゃんは、一本を三人で飲んだ。三人ともあまり牛乳が好きじゃなかったのだ。寒かったし、壜に直接口をつけるのも気持ちが悪かった。壜は回収制で、何度も使うのだと知っていた。母と弟は一本ずつ飲んだ。飲みおわると、弟は鼻が赤くなっていた。

深町直人とは最近知りあった。高校時代の友人が紹介してくれたのだ。友人といっても在学中はほとんど話をしたことがなく、家が近いせいで卒業後に親しくなった。近所のクリーニング屋の娘で、

お嬢さん学校として有名な短大に通っている。すらりと脚がながく、茶色い髪をおかっぱにした、かわいらしい人だ。

それで先週の金曜日、彼女と彼女の恋人と、私と深町直人とでごはんを食べた。下北沢のイタリア料理屋だ。クリーニング屋の娘は、

「こんなふうに一度ダブルデートというのをしてみたかった」のだそうだ。

スパゲティだの肉の煮込みだのを食べながら、みんなワインを飲んだけれど私は飲まなかった。十九歳だからだ。どんなに馬鹿げた法律でも、法律は守らなければならない。私たちきょうだいは、父にそう教えられていた。

男の子たちはおなじ大学の学生で、どちらも普通に感じがよかった。見ためもまあ悪くない。ちょっとしたお友だちにはもってこいだと思った。私の友人とその恋人は、さっきからずっとテーブルの下で手をにぎりあっている。

「じゃあいまはなんにもしていないんだ」

優雅だなあ、と言って、友人の恋人はわらった。去年の春に高校を卒業して以来、そう言われることにはもう慣れていた。はい、とこたえて私もにっこりわらってみせる。お水の入ったゴブレットごしに。

「バイトくらいしろとかって言われない？」

空いている片手で器用にフォークを動かしながら、友人の恋人が重ねて訊いた。私は首をふる。

「言われないわ。二十歳までは彼らに扶養義務があるもの」

男の子たちはちょっと変な顔になる。男の子というのは、女の子が義務とか権利とかいう言葉を使うのを好まないものだ。
「こと子の家族、仲がいいのよ」
とりなすように、クリーニング屋の娘が口をはさんだ。
「家族の行事がいっぱいあって、そのたびにみんながあつまるのよね」
そうなの、と言って私がうなずくと、深町直人がたのしそうな顔をした。
「家族の行事？」
「お正月とか、お花見とか、家族みんなの誕生日とか」
「へえ。めずらしいね」
パンをちぎりながら言う。
「なん人家族なの」
深町直人はあっさりしたダンガリーシャツを着ていて、それがよく似合っていた。変に日に灼けていないのも清潔な気がした。
「六人」
私もパンをちぎりながらこたえる。
「でも誕生日のお祝いは五回。下の姉のと弟のは一ぺんにやっちゃうから。二人とも十二月生れなの」
「なるほど」

私は深町直人が気に入った。
デザートに、私はケーキを三つたのんだ。甘いものが好きなのだ。こういうことをするとしま子ちゃんはいつも怒る。みっともない、と言う。でもほんとうは、私が太らないたちなのを妬いているのだ。そよちゃんはちょっとふっくりしているけれど、しま子ちゃんは痩せている。それなのにしま子ちゃんときたら、太ることをそれはそれは怖がっているのだ。
帰りは深町直人が送ってくれた。クリーニング屋の娘とその恋人は、もう少し飲みたいと言ってどこかにいった。
「あなたのお友達は左利きなの？」
二人になると、私はずっと訊きたかったことを訊いてみた。深町直人はよくわからない顔をする。
「ほら、あの二人ずっと手をつないでいたでしょう？　もともと左利きなのか、それとも彼女と手をつないでいるために左手を使っていたのかしらって……」
ああ、と、深町直人は納得したように言った。
「左利きだよ」
私は感心した。恋人が左利きだとすごく便利だ。そう感想を述べると、深町直人はわらっていた。

ふうん。
弟は、いったんグレーに塗りつぶされた小さな裸体の人形に、白に近い肌色の塗料を丁寧に塗り重ねながら、

「その人は左利きじゃないの？」
と、しずかに訊いた。
「うん」
残念だね、と、人形から顔を上げずに言う。私は、人形のつけるミニチュアの下着を指でつまんだ。まっ白で、端にレースがついている。
「すごくグラマーなのね、このお人形」
私たちの小さな律は、今年十五歳になる。だからもうたいして小さくはないのだが、私はどうしても、律のことを小さな弟と呼んでしまう。弟、と、小さな、は律にくっついているのだ。小川軒のレーズンウィッチの、二枚のビスケットとバタークリームのように。
小さな律は、無口ということになっている。うちでもそんなに喋らないけれど、学校ではもっと全く喋らないのだそうだ。問題児というわけではないが、変り者扱いにはされているらしい。
これは、私たち家族には信じられないことだった。なにしろ律は、家族じゅうでいちばん正しくバランスがとれていて、みんなに信頼される存在なのだ。
ただ、子供の頃の律は、たしかに少し変わっていた。そのことをうちじゅうでいちばんよく知っているのは私だと思う。私たちは一緒に小学校に通っていたし、私が小学校を卒業したあとも、律をピアノ教室に連れていくのは私の役目だったから。律はピアノが上手かった。モーツァルトが好きで、二年生の発表会ではトルコ行進曲をつっかえずに弾いた。
ピアノ教室は電車で一つ隣の駅にあり、律が通っていたのは水曜日の夕方だった。冬などおもては

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

すっかり暗くなっていて、ドアをあけると蛍光灯がしらじらとしていたことを思いだす。受けつけの女の子たちの飲む、インスタントコーヒーのうすっぺらな匂い。

「ああそうだ、忘れてた」

私はグレーのネルシャツの胸ポケットから、小さなカエルのおもちゃをだして律の机の上に置いた。

「あげるわ。これ」

きのうの夜、渋谷の交差点わきで、駄菓子と一緒に屋台にならべて売っているのをみつけて買った。きっと律の気に入るだろうと思ったのだ。

「なに？　これ」

カエルはプラスティックでできていて、はっきりした黄緑色だった。黄色くて平べったい足がついている。あごのあたりに小さな吸盤があり、上から押すとそれが足にくっついて、手をはなすと少しだけ遅れて吸盤もはなれる。その拍子にカエルはかたんとうしろへ宙返りをした。

「おっ」

案の定、律は目を輝かせた。人指し指でカエルの頭を押さえては、手をはなして宙返りをさせている。一つ宙返りをするたびに、カエルは体一つぶん後退していった。跳びあがるときの勢いがよすぎて、元の位置には着地できないのだ。

「へんなやつ」

おかしそうに律は言い、カエルをつかんでひきだしにしまった。合格だ。カエルはたしかに弟の気

に入った。
「それじゃあね」
私がドアの方に歩きかけると、階下で電話の鳴る音がした。父だ。すぐに母があがってくるだろう。化粧をおとして顔を洗い、化粧水で顔をぴかぴかさせるために。
「もうじきごはんだね」
私は言い、ドアをあけた。
「ことちゃん」
なに、と言ってふりむくと、弟もふりむいて、利き腕のことだけど、と言う。
「利き腕のことだけど、ことちゃんが練習してみれば？　真面目にやれば、フォークくらいきっとすぐ左手で使えるようになるよ」
「……そう思う？」
小さな弟は力強くうなずいた。

自分の部屋にもどると、ノックの音がして母が入ってきた。母は、いつもノックをすると同時にドアをあけるので、あまりノックの意味がない。
「葉っぱをとってきてほしいんだけど」
すでにつるつるになった顔で言う。
「もみじを四枚、それ以外にも紅葉した葉っぱをできるだけたくさん」

だいたい週に一度の割合で、母は食卓にその手のものをとりいれる。葉っぱとか枝とか松ぼっくりとか、小石とか月光とか貝殻とか。詩人なのだ。

「大きさも考えて拾ってきてね。もみじは小さめ、それ以外の葉っぱはいろんな大きさをとりまぜて」

母は注文をつける。

「それから枝についてるのをむしっちゃだめよ」

葉っぱならわけはなかった。母の要求はときとしてかなり困難で、いまなら無論母にそれは無理だと言いもするけれど、子供の時分、私たちきょうだいはずいぶん苦労をさせられたのだった。みどり色のくりのいがを六こ、とか、すすきを十本くらい、とか。さんざんさがしてみつからず、途方に暮れてうちに帰ると、母はいつでも待ちくたびれていた。さがしものがほんとに下手ね。そう言って自分ででていった。そして、不思議なことに、母はどこからかそれをみつけてくるのだった。

黒いジャンパーをひっかけて、近くの公園にいく。葉っぱはいくらでもあった。しっとりした土の匂い。赤茶や黄褐色の葉っぱの上を、濡れ濡れと街灯が照らしている。父の大きなサンダルで、落ち葉をふみしめながら歩いた。

四枚のもみじとたくさんのその他の落ち葉。きれいなものを拾おうと思うと、それでも存外手間取った。落ちている葉っぱの大半は、すでに夜気に湿ってしまっていた。かがみこんで一枚ずつ選ぶ。ときどき、うしろでしゃーっという音がした。ライトをつけた自転車が、そばの道を通りすぎていく音だ。自転車がいってしまうと、あたりはまたしんとした。上をむくと月夜だった。

うちに帰ると父がもうお風呂から上がっていて、母は待ちくたびれていた。
葉っぱの入った手提げを母にさしだす。
「おかえりなさい」
私はビールを飲んでいる父に向かって言った。父は、うむ、というふうにこたえる。
「どこまでいってたの」
母が葉っぱを検分しながら訊いた。外から帰るとリビングはすごくあかるい。
「公園」
下をむくと、紺色の靴下に、かりかりになった枯れ葉のかけらがくっついていた。
「わざわざ公園までいかなくたって、葉っぱくらいそのへんにあるでしょう？」
だって、と言って靴下の枯れ葉をむしるようにとる。
「いいからはやく手を洗っていらっしゃい。それから律を呼んできて」
私は不当な仕打ちをうけたような気がしたが、仕方がないので洗面所にむかう。
「でもいい葉っぱだわ」
母は嬉しそうに言った。

落ち葉はテーブルのまんなかにどっさり敷きつめられていた。その上にのった大皿には、オーヴンで焼いたばかりのなすやじゃがいもやズッキーニが盛ってある。それを銘々、塩やバターで食べるのだ。もみじはさんまの塩焼きに添えてある。それからしめじごはんと大根のおみそしる。

「秋のごちそうよ」
母が言い、
「野趣溢れてるね」
と、律だけがかろうじて微笑みながら言葉を返した。
ほんとうのことをいうと、私は野趣溢れる食卓があまり好きじゃない。落ち着かないのだ。たぶん父もそうだと思う。あぶらがしみてぎたりとさんまにはりついた、暗紅色のもみじを箸でつまんでよける手つきでそれとわかる。
私たちはぼそぼそと食事をした。四人で食べるときにはいつもそうなのだ。そして、去年そよちゃんがお嫁にいってからというもの、このうちはたいてい四人なのだった。
母ははりあいがないと思っているだろう。まるごとのじゃがいもや葉っぱを使った演出に、いちばん好意的な反応を示すのがそよちゃんのはずだったから。
そよちゃんはおとなしい人だから、歓声をあげたりは勿論しない。でもたぶん小さく息をのんだりするだろう。まあ、と言ってテーブルの上を凝視する。
私は冷蔵庫をみた。冷蔵庫の扉にごく小さな額縁型のマグネットが貼りつけられていて、そのごく小さなクリーム色の額縁には、そよちゃんの写真が入っている。心もち首をかしげて、うんとやさしく微笑んで。それはとても奇妙な感じだった。冷蔵庫の扉なんかに姉がくっついてわらっているというのは。
「こと子」

さんまから顔をあげて父が言った。
「さっきから気になっていたんだが、それはなんのまねなんだ」
ふちのないまるい眼鏡から、温和な目が遠慮がちに私に注がれている。
「吊ってるの」
私は説明した。
「ごはんを食べるときに右手を使ってしまわないように、右腕をスカーフで吊ってるの」
「……」
父は私の右腕をじっとみつめた。母も食べるのをやめている。弟だけがお行儀よく食べ続けながら、
「魚、むしってあげるよ」
と言った。
「ありがとう」
私は左手でお椀を持って、大根のおみそしるを啜る。
「……なぜ右手を使っちゃまずいんだ？」
スカーフは、しま子ちゃんの部屋から借りてきた。セリーヌだかフェラガモだかの、すごく派手なやつだ。
「だって便利でしょう？　両方使えると」
「……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com